

# 「オネエ所長の調査ファイル」 # 16

山崎浩治

1

「そんなに女になりたいきゃ24時間女装すればいいのに、所長」

「あのねトオルちゃん、フルタイムで女装するってことは、お妻さんを囲うくらいお金がかかるの。残念ながらあたしに、そんな甲斐性はないわ」

「それで女装のパートタイマーなんですね」

「いわば、あたしは`非正規オンナ、。いまの世の中って一度、非正規雇用になってしまうと、正社員になるのが難しい時代でしょ？ オネエだっておんなじなのよ。男として生まれてしまうと、`正社員オンナ、になるのは何かと大変なんだから」

平日の昼、「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とイケメン調査員の透がとある外食チェーン店で食事中だ。この日の市山はセミロングのカツラに、パステルカラーのワンピースとシングルボタンのジャケットを身にまとい、本人は「卒業式帰りの母親」をイメージしているようだが、その似合わなさは神の領域だった。

今回の依頼人は春から就職が決まっている金沢市内の大学に通う大輝(22歳)である。1年前からアルバイトしていた飲食店に未払い賃金が20万円ほどあり、大学卒業を前に請求したいが、どうしたらよいかと相談してきたのだった。

ランチタイムで混雑する店内では30代の男性スタッフと40代の女性スタッフが忙しそうに動き回っている。空席がいくつかあるものの、店の入り口には数組の客が並んでいた。見ると、空席のテーブルは前の客が残していった食器が放置されたままで、片付ける手が回らないため客を案内できないようだ。店長とおぼしき男性スタッフは厨房の仕事も兼務しているらしく、人手不足なのは明らかだった。

「これだけ繁盛してるのに、賃金未払いなんて解せませんね」

透が呟くと、市山が答えた。

「店はタイムカードに記録された出勤時間前、退勤時間後に仕事をさせてたの。ブラックバイトがよく使う手よ」

2

「求人誌の広告には`時給1000円~、とあったのに、実際は800円スタートで、最終的に850円までしか上がらなかったんすよ。これって反則じゃないすか」

「労働契約書はどうなってるの？」

「面接の時に書いた書類すか？ そんなの、とっくに捨てちゃいましたよ」

「中身は読んだ？」

「いや~、サインしただけっすね」

「あなたね、労働契約書に`時給は850円まで、と記載されていれば、あなたは合意したことになるのよ」

「あっちゃー、そうなんすか！ 大人の世界は怖いっすね！」

「金沢プライベート・リサーチ」を訪れた大輝は言動にいささか軽薄な印象を与えるが、素直で憎めない好青年だった。

「タイムカードに記録されていない分の未払い賃金を請求したいということだけど、実際の出勤・退勤時刻を立証する証拠はあるの？」

「いやあ、それもないんすよね」

「何かを請求しようとする時、その請求が正当であることを立証する責任は請求者、つまりあなたにあるのよ。出勤・退勤時間ぐらい手帳にメモしておきなさい」

「やっぱ、未払い賃金もらうのは難しいっすかね。もしもらえたら、卒業旅行で海外にでも行こうと思ってたんすけど」

「一緒に行くのは恋人かしら？」

「えへへ、分かります？ 彼女に未払い賃金もらえば海外に行けるんじゃないか、って言われたもんで……」

屈託のない笑顔を浮かべた大輝に市山が続けた。

「ブラックバイトは学生の社会的経験の未熟さや法律知識の乏しさにつけ込んでくるわ。証拠がなければ未払い賃金の存在は証明できない。誰かあなたの実働時間を証言してくれる人はいないの？」

「ちょっと探してみます」

それから数日後、大輝が「証拠が見つかった」と嬉々として連絡してきた。同僚のパート女性がシフト表をコピーしており、大輝の実働時間が明らかになったのである。

### 3

実家の商売が経営不振に陥り、憔悴した父親から「学費はなんとか工面するが、生活費はそっちでなんとかしてくれないか」と打ち明けられたのは大学3年の秋だった。金沢のアパートで一人暮らしをしていたので、家賃を含めた生活費は切り詰めたとしても7～8万はかかる。最終的に借金となってしまう奨学金は使いたくなかったので、求人誌で見つけた近所の飲食店でアルバイトを始めることにした。

面接でよく分からない書類に一方的にサインさせられ、分厚い業務マニュアルを渡された。就業時間前に店に来て事務所でマニュアルを覚えるように指示されたものの、店長の卓也(37歳)が言うには、「マニュアルを覚える時間は研修なのでタイムカードは押すな」という。営業が終わってタイムカードを押すと今度は店舗のメンテナンスや掃除を指示され、「後片付けは仕事のうちに入らない」が店長の言い分だった。そのくせ、タイムカードの時間は15分未満切り捨てで、休憩時間はきっかり、さっ引かれていた。

バイトを始めて1カ月後、「時間帯リーダー」に昇格した。その時に求人誌に記載された時給1000円になるのかと思ったら、時給は10円アップしただけの810円。その割に仕事はきつく、責任は重かった。店舗で正社員は店長一人しかいないため、卓也が休みや食事、休憩など

に入ると時間帯リーダーが正社員並みの仕事と責任を担うことになる。おまけにシフト管理や新人アルバイトの教育、資材の発注などは営業時間外にやられるので、一度シフトに入ればなんやかんやで毎回2時間は「サービス勤務、を強いられたのだ。

バイト生活に明け暮れ、たいして勉強もしないうちに大学4年になり、気が付くと就活が始まっていた。交通費に宿泊費と就活には何かと金がかかったが、経営再建中の実家には頼れない。やむなくバイトを続けると、「人手が足りない」と無理なシフトを組まれ、就活中だというのに週40時間勤務することもたびたびあった。

バイトが終わって部屋に帰り、志望動機や自己PRをむりやりひねり出し、数えきれないほどエントリーシートを書いたけれど、大輝を採用してくれる会社はなかった。バイトに追われて満足に企業研究できなかったことも原因の一つのように思える。

「お祈りメール」という名の不採用通知のつるべ打ちは、自分が社会から必要とされていないことを思い知らされた。やがて「採用してくれるなら」と半ば捨て鉢な気分で決めたのが、春から働く就職先だった。大学の同級生である彼女と早く結婚したかったので、非正規雇用は避けたい。なんとしても正社員に、という焦りもあった。

実家近くにあるその会社は例年、年度の最後まで募集を行っており、大輝のような「どんな条件でも」という学生を採用しているようだった。全国的に無名の会社だったので、ネットに誹謗中傷はなかったが、「ブラック企業かもしれない」という不安は払拭できない。安心して働ける会社に入ることがこれほど難しいのか、と大輝はため息をつく。

#### 4

大輝がバイトを辞めると伝えた際、シフト表を元に計算した未払い賃金を支払ってほしいと直談判すると、店長は「学生が権利のことばかり言っていると就職してから大変だぞ。労働基準法を守っていたら経営なんて成り立つか。社会は厳しいんだからな。訴えるなら訴えてみろ」とけんもほろろな対応だった。

「金沢プライベート・リサーチ」を訪れ、ことの顛末を報告する大輝に、市山がアドバイスした。

「そうやって開き直った以上、相手に未払い賃金を支払う意識はまったくなさそうね。となれば労働基準監督署へ相談するか、裁判を起こすか」

「ぶっちゃけ、どっちがいいんすか」

「労基は会社に法令違反があれば、行政指導してくれるけど、あなたに代わって未払い賃金を請求してくれるわけじゃないの」

「そうなると裁判っすね」

「弁護士に依頼すれば一定の費用がかかるし、裁判だからある程度の時間も必要よ」

「オレ、春から就職するんすよね。そうそう裁判には出られないっす」

困惑した表情の大輝に、市山が告げた。

「通常の裁判よりも短期間で審理を行う『労働審判』という裁判所の手続きがあるわ。原則とし

て3回以内の期日で終了するから、即効性もあるの。一度、弁護士に相談してみたらどう？」

「了解っす！」と大輝がおどけて最敬礼して見せた。

5

しかし大輝はその後、労働基準監督署や労働審判を申し立てることなく、大学を卒業して就職した。店長の卓也が「この一件を表沙汰にするなら、就職先に連絡して勤務態度を報告する」と連絡してきたためだ。「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスで、透が口をとがらせた。

「それで依頼人は泣き寝入りしたわけですか！」

「勤務態度が悪い、仕事ができない、人間関係でトラブルを起こす。悪評なら、何とでも言えるからね。それ以上に彼は不払い賃金で法的な処置をとることを会社に知られたくなかったみたい。四角四面の正義漢と思われ、職場で浮いてしまうと考えたのね」

しばらく後、市山と透が飲食店を訪れると、経営母体が異なる別のチェーン店が営業していた。大輝が勤務していた店舗は求人広告を出してもパート、アルバイトが集まらず、人手不足を補うために長時間働いた卓也が体を壊して休職、それからほどなく閉店したのだった。倒れる直前の卓也の残業時間は月間100時間に達していたという。部下の女性パート社員には「会社を辞めたいが、辞められない。子どもを大学まで行かせたいんだ」とこぼしていたらしい。自宅のある関東に妻子を残し、金沢に単身赴任していた彼もまた、ブラック企業の被害者だったのだろう。

1年後の3月下旬。のんびりとくつろいだ空気に満ちた「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスで、市山と透がとりとめのない会話を続けていた。

「女はいくつになっても女の子。だから、ひな祭りにはひな人形を飾っちゃうのよ。だけど、ひな祭りが終わってもお人形を片付けないから、あたしはいつまで経ってもお嫁さんに行けないわけ」

「所長がお嫁に行けないことと、ひな人形は別問題だと思いますけどね」

そこへ大輝がぶらりと尋ねてきた。一緒に海外旅行に行こうとした恋人は金沢で就職し、遠距離恋愛を続けてきたが、有給を取って会いに来たのだという。

「いまの会社を思えば、あのバイト先なんてブラックどころか、グレー企業でしたよ。社会人になって以来、定時で帰ったことは一度もないし、死ぬほどこき使われてます。給料も雀の涙の営業手当が出るだけで、残業代は一切なし。ガチのブラックなんすよ！」

快活に笑う大輝に、市山が訊いた。

「口で言う割に楽しそうじゃない？」

「上司や先輩は厳しいですけど、会社が小さいせいか、オレを`育ててやろう、って熱意を感じるんすよね。最初は`こんな会社、ぜって〜ムリ、とか思ってたんすけど、なんか最近、ちょっとずつ仕事が面白くなってきたつーか。結局、ブラックかどうか決めるのは自分自身なんだな、って」

入社して3キロ痩せたという大輝の表情からは、学生時代の甘さが消えている。頑張れよ、と

市山が心の中でつぶやいた。